

研究代表者 所属・職：経済学部・教授

氏 名：曲田 浩和

研究課題名：マルジュウ杉江家の窯業と常滑焼の展開

### 研究の概要

マルジュウ杉江家には大量に古文書が残されており、その調査を行った。古文書調査は、曲田浩和、高部淑子、鈴木えりも、鈴木勝美が行い、調査の進捗管理は高部淑子が行った。現在調査中であるが、約5万点の史料のデータ化を行った。

マルジュウ杉江家は江戸時代から続く常滑焼の生産者であり、主力製品はどのようなものかは不明であるが、急須などの細工物を作っていたことは確認できる。明治期後半からは土管、昭和戦前期には建築陶器を、戦中期には人造砥石の製造・販売を行った。杉江家に残る古文書は、昭和6年(1930年)からであり、昭和戦前期には土管製造は行われていなかったと思われる。戦後すぐは砥石製造が再開され、昭和25年(1950年)ころより建築陶器製造が再開された。ただし、今回の研究により、戦後に生産された建築陶器は戦前のカラフルなタイルではなく、クリンカータイル(階段タイル)などの茶褐色のタイルを製造していたことが明らかになった。

小栗康寛(市民研究員)は、クリンカータイルの生産に欠かせない食塩釉に注目した。食塩釉とは、高温焼成中の窯に食塩を投入し、ナトリウム分を素地表面でガラス化させて得る釉薬である。安価で飴色や褐色の独特な色合いを出すことから、大気汚染法が制定される1970年ころまで石炭窯・重油窯などで使われた釉薬の一つである。杉江家で使用された食塩釉の原材料の食塩のなかには、遠洋漁業の鯨の塩漬けに用いられた塩が含まれることが明らかになった。当時、塩は専売品として専売公社の扱いであったこともあり、入手経路など今後の研究に待たれるが、高度経済成長下の常滑焼の製造を考えるうえで重要である。

曲田浩和は、マルジュウ杉江家の戦後の経営を中心に検討した。杉江家は、昭和23年(1948年)、東陽製陶有限会社を資本金3万円で設立し、人造砥石のちにクリンカータイルの製造・販売を行った。設立年の売上高は約270万円で約5万円の赤字であり、利益が出るのは昭和25年(1950年)であり、建築陶器の製造・販売を再開したころであった。昭和26年(1951年)には資本金を6万円に増資した。昭和40年(1965年)には、資本金12万円、売上高7800万円、純利益790万円の企業に成長した。翌年、東陽製陶有限会社は東窯工業株式会社に改称した。このころ、当社の売上高はクリンカータイルより人造砥石の販売が多くなったものと思われる。時代の流れもあり、建築陶器としてのタイル需要が減っていく時期でもある。また、石炭窯・重油窯の時代から、ガス窯・電気窯へと変化すると建築陶器生産も激減する。伊奈製陶株式会社(現LIXIL)などの大手の製陶会社では継続されるものの、マルジュウ杉江家では建築陶器生産はしだいに行われなくなった。

高度経済成長期における常滑焼の製造・販売の研究は少なく、ほとんど実態は知られていない。マルジュウ杉江家には焼物に関わる製造・販売の古文書が約5万点(調査中、2026年4月現在)ほど残されており、とくに昭和20年代から昭和40年代にかけてのものがほとんどである。史料の内容は、原材料の仕入、工作機械の調達、窯の構造をはじめとする製造、製品の硬度、色合い、接着などの用途に合わせた研究、消費を見越した販売相手の発注先との関係などの販売・流通などの多岐にわたる。建築陶器はビルディングの建築ラッシュの時代を支える、人造砥石は高度化が急速に進む機械の研磨に欠かせないものである。常滑焼は土管・急須・招き猫などに注目が集まるが、すべりにくい階段のクリンカータイルや研磨材としての人造砥石など、生活する上で重要な役割を果たしていたものも存在する。マルジュウ杉江家の東陽製陶有限会社・東窯工業株式会社は、高度経済成長時代の常滑焼の企業として位置付ける必要がある。